

理事長就任にあたってのご挨拶



和歌山地域経済研究機構

理事長 遠藤 史

【和歌山大学経済学部長】

和歌山地域経済研究機構は、和歌山商工会議所、和歌山社会経済研究所そして和歌山大学経済学部の三者によって平成8年7月に創設されて以来、和歌山の地域経済を活性化するための、地域に根ざしたシンクタンクの機能を担う機関として順調な発展を遂げてきました。今回、私は和歌山大学経済学部長に任命され、さらに本機構の理事長も拝命することになりました。私自身は地域経済研究の専門家ではありませんが、和歌山という地域に住み、地域の発展を希求する立場において、専門家集団たる本機構とは、その願いを共有するものと考えております。未だ浅学非才の身ではありますが、皆様の研究活動を微力ながら支えていく所存でございますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

個人的な体験になりますが、私が和歌山大学に赴任したのは昭和63年の春でした。赴任早々、和歌山の中心街に行ってみると、ちょうど旧丸正が閉店セールを行っているところでした。自分にとっての新しい街はとても興味深く、古色蒼然とした風格のある建物の味わいや、それを取りまく街や人々の賑わいを嬉しく眺めました。平成に入って丸正の新館が建ち、活気に溢れていたぶらくり丁周辺でのショッピングを家族と楽しみ、和歌山という街に急速に親しみがわいてきた頃のことを思い出すとき、現在に至る和歌山の地域経済の急激な状況の変化を痛感せずにはられません。

これと多くの点で並行する状況の変化が、和歌山と地域に限らず全国各地で起こってきたことを様々なメディアによって知ると、いくつかの素朴な問いが心にわき起こります。たとえば、これほどの変化を起こさせた経済のメカニズムとはどのようなものだったのか。あるいは、そのメカニズムの解明が可能ならば、それに基づく新たなまちづくりの処方箋はどのようなものか。和歌山の地域経済の今後の発展の可能性はどこに求められるのか。一私のような非専門家はこれらの問いを心に抱くのみです。しかし幸いなことに、和歌山地域には専門家の集まりである本機構が存在します。研究に携わる方々が様々な視点から研究を推進し、その研究に基づいた刺激的な活性化の提案を行ってきたこと、そして今後も推進していくことは、とても心強く思えます。私自身も、たとえば本誌に掲載されている研究成果等を読むことによって、少しでも地域経済の現状を知り、自分がどのように地

域経済に貢献できるかを探りたいと考えています。

和歌山という地域はまた、一つの閉じた世界ではなく、他の地域との様々な相互関係を有します。経済・交通・文化など様々な領域でグローバル化が進む今日の世界を考慮するならば、今後の地域経済の発展を考えるには、グローバルな潮流とローカルな状況との響き合いに注目することもまた必要であろうと愚考します。すなわち、本機構で行われる研究は、ローカルな諸問題を専門的な視角から深く追及すると共に、一方では広く世界に開かれた視点も持つ必要があると言えるでしょう。この意味で言うならば、国内外における「うまくいっている」地域経済や、「賑わっている」中心市街地との対照研究も、ひよっとすると本機構の研究に新たな視点を提供してくれる可能性があるかもしれません。

外国語・外国文化を研究する者として、私自身は世界の様々な地域に関心を持ち、そのいくつか実際に滞在する経験も持ちました。その中にはソ連邦崩壊直後のロシアの地方都市などという何ともいえない沈滞した状況も含まれていますが、まちづくりという観点から考えるなら、20世紀最後の2年間を過ごしたオランダでの経験は印象深いものです。ライデンという小さな大学町での滞在でしたが、街の中心部の運河沿いにカフェが並び、市場の立つ日もなれば、いったいどこにこれほどの人が暮らしていたのだろうと思うほどの人波が中心街に押し寄せる活気ある光景は、今も心によみがえります。もちろん人口や経済においては和歌山とは比較にならないほどの規模ではあるものの、その賑わいを回想すると、街の歴史への愛着やまちづくりへの参加の意欲、といった文化的な要因とともに、やはりそこには地域の基盤を作る専門家たちが存在し、小さいながらもまちづくりを進めていた経済のメカニズムがしっかりと働いていたに違いありません。

地域の発展という課題に取り組むことは、総合的な問題を解くことでありましょう。しかしその問題解明の中心に存在するのが地域経済の研究であるということは明らかです。和歌山という地域が今後、さらに輝く、生き生きとした地域となる日をイメージしつつ、本機構における研究の発展を心より願います。